

はじめに

我が国の沿岸は縄文時代から水産資源を利用してきた多くの遺跡（貝殻、魚介類の骨等）があり、また一方で、「たたら製鉄」、「製塩」、「陶器づくり」等を使う薪を山から切り出したことによりはげ山となり、そこから花崗岩が浸食・風化されて石英・長石・雲母などの白砂が白砂青松の景観を生むなど、古来から人の関与によって維持されてきた二次的自然、つまり「里海」と呼べる存在である。

その主要な資源である「藻場・干潟」は、沿岸において豊かな生態系を育み、水生生物の生育にとって非常に重要な役割を担っている。また沿岸に住む人々にとっても直接の採草漁業も含め漁業者の活動を通じてその恩恵を享受してきた。

かつての瀬戸内は、多島海ゆへの静かな海面に砂浜と岩礁が入り交じり、浅場にはひろくアマモ場、ガラモ場等や干潟がひろがっていて、その地先の人々が食料や農地の肥料に海藻藻類を利用してきた。また藻場・干潟は生物多様性の維持、水質の浄化、海岸線の保全に寄与しているとともに人々にも環境学習の場、保養の場を提供してきた。

しかし江戸時代からの新田開発、塩田用地確保や戦後高度経済成長期の浅場の埋め立て、工場排水、生活排水による水環境悪化、さらに気候変動に伴う海水温上昇により、藻場・干潟が大幅に減少してきた。

藻場・干潟の減少と追従するように沿岸漁業の漁獲量も減少傾向がみられることから、国による藻場・干潟の実態把握の調査や国、自治体、漁業者、民間等の多様な主体の連携によるハード・ソフト対策が進められてきた。平成28年には更に実効性のある藻場・干潟の保全・創造対策として水産庁から「藻場・干潟ビジョン」が示され、今後地方公共団体が中心となって、海域を広域的にとらえた計画の作成及び体制の構築を行う事となっている。#

また、瀬戸内の沿岸部の多くが海の生態系を保護し持続的に生態系を利用していくための海洋保護区に指定されており、これらの取り組みは、生物多様性の保全の観点からも注目されている。#

失われた藻場や干潟がどのようになったのかを反省し、今日のSDGsで示されている持続可能な自然との関係性を築いていくという視点が重要であり、今回「瀬戸内における水環境を基調とする海文化」の一つとしての「藻場・干潟と保全の取り組み」を紹介することにより、「豊かな海の確保」に向けてこれから藻場・干潟で保全の取り組みをはじめ、又は既に取り組んでいる関係者へ参考となれば幸いである。#



藻場（アマモ場）
（神戸大学教授川井浩史氏提供）



藻場（ガラモ場）
（出典：沿岸漁場整備開発事業写真集「豊かな海」）

#



干潟（中津干潟）
（NPO法人水辺に遊ぶ会提供）